

なぜ山に登るのか？

教育企画推進部 吉井 謙太郎

部長と副部長が探究の話をしたので、私は探究の話はしないで済みます。

みなさんは長田高校がどんな学校だと思いますか？…生徒も教員も最初はまず「自由な学校だ」と答えるわけですが、これほど解像度の低い答えもないと思います。別にぜんぜん自由ではないとすら思います。長田高校として「学校」という枠組からは自由ではないからです。学校を形成する法律や常識、世の流れその他あらゆるものから、自由ではないのです。生徒も大人もそうですが、そのことの自覚もないままに都合よく長田高校の「自由（らしき何か）」を謳歌するというのはいかなものかと思うこの頃です。

長田高校が自由かどうかは、本質的にどうでもいいと私は思っています。構成要素の方が大事です。私はそれを山岳部員と山に登りながら考え、ときに部員に問いかけています。彼らは山行を遂行するために自分たちで課題をみつけ、解決の道筋を立てて、惜しみなく協力して物事を前にすすめます。その過程で危険であると分かれば容赦なく自分たちの計画を棄却する果敢さも培います。彼らにとって重要なのは結果（山頂）ではなく過程（どう過ごしたか）です。その活動を周囲にひろげることにも全力だからこそ、あれだけの人数が集まるのです。私はしばしば「人数は正義だ」と標榜するのですが、これはそうした一連の結果を指して言っているのです。決してそれ自体を目標になどしていません。魅力と意義の発信の結果なのです。

探究の話をするつもりがなかったのにいつの間にか探究の話になってしまいました。仕方がないのです。いわゆる探究的学びなど、別に目新しいものではないのですから。あらゆる活動に内在

するもの/してきたものなのです。「あなたが身につけてきたこと、教えてきたこと、これから活用しようとする事」の全てだと思うわけです。山岳部を私は象徴的に挙げてみたに過ぎないので。彼らが山岳部で培うのは、長田高校が身につけて欲しい3つの力である「みつける」「すすめる」「ひろげる」そのものですが、それすら目新しいものではなく、あらゆる教育活動に本来内在するはずのものです。

母校で教員をしたくて高校教師になりましたが、実は私が今している仕事は、全て想像の範疇にはありませんでした。特色類型は存在しませんでしたし、探究もしてきていません。音楽部のOBでした。登山経験は皆無でした。これといって国際交流に強みがあったわけでもありません。ならばそれをなぜやるのか？…神撫教育と生徒の力を信頼しているからです。私は彼らと山に登りながら、それを実感したのです。

そういうわけで私の表題の問いに対する回答—これは、一般には「そこに山があるからだ」となるのですが—は、「それが神撫教育だからだ」ということになるのです。

探究授業の記録・報告

6月6日（木）6～7 時間目

1年一般・類型「理数探究基礎（探究入門）」

特別講義

「心理的アプローチによる

イノベーション創出とベンチャー起業

～半導体分野のイノベーションを事例に～」

大阪大学大学院 工学研究科 教授

森 勇介先生

半導体は台湾の TSMC がその最先端ですが、現在の世界情勢を左右する科学技術であり、私たちの生活になくてはならないものです。この分野における技術革新に重要な CLBO 結晶の開発と、その発想の陰にある科学者の決して折れない心

の在り様について講義していただきました。従来、森先生には探究入門の中で特別講義をお願いしていましたが、今年度は1年生全員で受講することとしました。



<生徒の感想より>

(印象に残った言葉)

「戦略は文化に合わなければ成功しない」

(その言葉についてあなたが考えたこと)

私は今回の授業で様々なことを学んだ。

日本人は歴史的背景や環境文化によって、集団の中で生きることになれ、相手と調和をもってかかわれるという特徴がある。それによって相手に気を使いすぎ、メンタルが不安定な傾向があると知った。潜在意識の中にあるトラウマも私たちの行動を制限する要因になるそうだ。

このメンタルは日本でベンチャーが進化しないことに大きくかかわっている。

一歩踏み出す勇気や絶対にできないと思わず挑戦することがイノベーションを生み、ベンチャーを進化させるのだと考えた。

これは私たちの生活にも当てはまると思う。最初からできないと決めつけず、まず取り組んでみる。笑われることを恐れず、発言すること。それらは私たちの成長を助けるものであると思った。

このように考えてきたが、まだ私には十分に挑戦していける力を持っているのかと疑問を持った。行動を起こす前にはたくさんの準備が必要であり、今は準備をする期間であると思う。

戦略は文化に合わなければ成功しないという言葉は、まず文化というものを知ることから始めるという意味であると思う。だから私は今からたくさんの知識をつけ、小さな挑戦を繰り返し、これから来る大きな課題に備えようと思う。

(印象に残った言葉)

「新しいことを見つけるには勘と運が大事」

(その言葉についてあなたが考えたこと)

新しいことをするには入念な準備と下積みを要すると思っていたが、まさか勘と運で大発見をしてしまうなんて驚いた。もちろん前者も大事だと思うけれど、思いつきも大切にして新しいことを発見してみたい。

<講義の中で紹介された書籍>



6月4日(火) 5~6 時間目

2年一般「総合的な探究の時間」

パナソニックホームズ フィールドワーク

ウインズタウン神戸みずき台 訪問

都市の課題解決の手法を学ぶ一環として、パナソニックホームズの協力により開発中の神戸みずき台地区を訪問しました。都市計画やコミュニティ活性化、住宅設計、SDGsの観点を生かした生物多様性のための取り組みなどを、実際の開発区域を視察しながら学びました。



<生徒の感想より>

・今回のフィールドワークで、街づくりを行う上で、その土地の自然環境を生かした土地形成(土をくずしてその土で谷を埋めて平地をつくる。風通しがいいので、風を感じてのんびりできる場所をつくること。)や街をテーマパークの様に5つの地域に分けるなどの様々な工夫により、住む人に愛され、安心してもらえる街づくりを行っていることがわかり、自分たちの当たり前にある街はこのように多角的な工夫がもたらされているのだと

驚いた。また、自分たちの探究に直接役立つことを多く学べて良い経験にできた。

・街作りにおいて他社との違いを出すことで顧客を呼び込むことなど自分の興味のある分野にも繋がってきてとても面白かったです。

・みずき台が蝶をコンセプトにしてそれを基準にすべてデザインしていて、コンセプトを決める大切さを感じた。収納など徹底的に考えられていて、探究をする上で見習いたい。

5月30日(木) 6~7 時間目

1年類型「探究入門」特別講義

「社会的存在としての人」

名古屋大学大学院 情報学研究科

石井 敬子先生

心理学という学問が、行動経済学や教育学、生物学など様々な学問に接しているということ、様々な実例を交えながらご講義いただきました。一人一人の行動様式から文化・価値観に至るまで、様々なスケールで心理学の研究・探究が行われていることを実感することができました。



<課題レポートより抜粋>

課題：「情報技術の発展によって世界中どこにいても同じ情報を手に入れることができる。言語の違いはあるとはいえ、文化の違いはいずれ消失する」という意見があるとします。今日の授業の内容を踏まえ、その意見に対するあなたの見解を述べてください。(注意：数学のように正答がはっきりあるわけではありません。自由にこたえてください)

・文化の違いは消滅しないと考える。なぜなら、情報の差が文化の違いを生み出しているわけではないと考えたからだ。講座で、以前の世代で有利な遺伝子が残っていったことによって文化が進化してきたり、ドーパミンや遺伝子の違いがそ

れぞれの文化の特徴を生み出していると学んだ。また、無意識のうちに日本の文化や価値観が沁みついていて感じたからだ。日本でもグローバル化や都市化の影響で、個人主義化が進んでいるが、価値観はあまり進んでいない。その理由として価値観の変化の遅延、教育等に前世代の価値観が維持されている点が示されたが、今教育を受けている立場の私にも日本の価値観があり、意識しても判断の際に影響している。だから、人々の価値観を根本的に変えるのはとても大変であると考え、文化の違いが消滅することはないか、消滅するとしてもとてつもない時間がかかると考える。

その他の活動報告

SSH 台湾研修 事前指導

5月29日(水) 放課後

長田消防署 防災講話・ワークショップ

長田消防署元職員 辻 正さん

台湾研修を軸として実施する防災課題研究の事前学習の一環として、阪神・淡路大震災当日の救助活動の最前線で活動した元署員の方をお招きし、講話とワークショップを実施しました。この活動は今年度、震災 30 年の関連事業として長田消防署と合同で実施する「生徒が考える防災学習」の一環として実施しているものです。

この連携事業の成果は7月の防災訓練でも還元できるよう、計画を重ねています。



<活動ログより抜粋>

・消火の時に川から水を吸い上げたという話を聞いて、意外とすぐに使える水って少ないんだと感

じました。至る所にあるように見えて、いざ災害が起きますと水道管は破裂してしまうかもしれない、そういうことを日常で考える機会があまりなく、たまにでもそういう話題について誰かと話すことが防災の1歩だと感じました。自分一人が対策するだけではどうにもならない事だと学びました。

・私達のような若い世代の関心をひこうと思うと体験型にしたり、ゲーム形式にしたりするなどの案が出たが、実際にその案を実施した時に、防災学習楽しかったね、で終わってしまわないか、不安に思った。そういった意味でも、日本各地の若者向けの防災学習の例を調べるのも一つ手だと感じた。

人文・数理探究類型英語ポスターセッション

盛況のうちに終了



講評などの詳細は次号に掲載

編集後記

1 学期の終わりが近づいてきています。2 年生は探究の方向性を固めて、1 年間自分たちが何を頑張っていくのかが徐々に明確になってきたのではないのでしょうか。とはいえ、「明らかにしたいこと」があっても、その道具立て（研究手法、実験の内容、それらを含む道筋…）は、いまだはつきりしないことも多いのが実情でしょう。

そのような時こそ、ぜひ先行研究を徹底的に深掘りするのがよいでしょう。自分たちがやりたいことに先立つ研究から、さらにその先行研究に立ち返っていく過程を経れば、どういう道筋で考えたらいのかが見えるかもしれません。

困ったときはぜひ教育企画推進部の先生方にも相談してみてください。私たちは答えそのものを示すつもりはありませんが、実現可能性を客観的に考えたり、見方を変えたりすることはできるかもしれません。ぜひ、参考にしてみてください。

人文・数理探究類型

英語プレゼンテーションコンテスト 案内

※ぜひ、3 年生の集大成を観に来てください！！

日 時：7 月 19 日（金：終業式当日）

午後 13:20 開場 13:40 開演

会 場：ピフレホール

（神戸市長田区若松町 4-2-15）

審査員：石川慎一郎 先生

（神戸大学教授 高 40 回・審査委員長）

梶田 秀夫 先生

（京都工芸繊維大学教授 高 40 回）

川崎 志慧 先生

（株式会社バックスバイノベーション研究員 高 54 回）

植松 啓 先生

（Science & Café Alchemist 胡麻主宰）

Mr. Joaquin Lopez （長田高校）

ほか、他校 ALT および校内審査員

発表形式：スライドによる口頭発表形式

発表 6 分＋審査員による質疑応答 5 分程度